



定本
原民喜全集

別卷

青土社

定本原民喜全集 別卷

© 1979, Seidosha

一九七九年三月五日 印刷

一九七九年三月一三日 発行

定価——四八〇〇円 0390-900024-3978

発行者——清水康雄

印刷所——東陽印刷

製本所——美成社

発行所——青土社 東京都千代田区神田神保町一ノ二九 市瀬ビル 〒101 (電) 二九二―七〇七六

編集委員 山本健吉・長光太・佐々木基一

石 波 文 庫

31-044-2

齋 藤 茂 吉 歌 集

山 口 茂 吉
柴 生 田 稔 編
佐 藤 佐 太 郎



岩 波 書 店

アルバム 原民喜

I

勝本清一郎	原民喜断章	8
伊藤整・神西清・福田恆存	創作合評	11
中野好夫・林房雄・北原武夫	創作合評	13
佐藤春夫	原民喜詩集叙文	16
三好達治	原民喜詩集を読む	18
山室 静	原民喜詩集	20
平野 謙	文芸時評	22
佐々木基一	原民喜詩集について	24
山本健吉	詩人の死	27
丸岡 明	原爆と知識人の死	42
塩谷雄高	鎮魂歌のころ	58
	びいどろ学士	62
長 光太	青い針裸身の	65
佐々木基一	原爆と作家の自殺	69
藤島宇内	原民喜おぼえ書き	80
遠藤周作	原民喜	96
佐々木基一	解説（角川書店版作品集）	118
寺田 透	原民喜	124
唐川富夫	原民喜論	137

いいだ・もも 解説（芳賀書店版全集） 149

竹西寛子 広島が言わせる言葉 167

大江健三郎 解説（新潮文庫） 175

長田 弘 わが原民喜 181

解説（晶文社版『ガリバー旅行記』） 197

II 鼎談 原民喜 佐々木基一・大久保房男・遠藤周作 203

III

山本健吉 青春時代の原民喜 234

幻の花を追う人 238

小海永二 少年原民喜 247

佐々木基一 原民喜断想 272

死と夢 276

壇谷雄高 原民喜の回想 281

長 光太 鬼籍 286

死の詩人・原民喜 290

丸岡 明 原民喜の死 302

原さん居るか 305

中村真一郎 原民喜との奇妙な出会 310

遠藤周作 原民喜と夢の少女 312

原民喜のいたずら 316

岩崎良三	牡蠣	319
本多秋五	火焰の子	321
庄司総一	無償の愛	325
堀田善衛	物云わぬ人	328
原 健忠	原民喜の文学と現代	332
鈴木重雄	追想に寄せて	337
龍野咲人	原民喜への憧れ	340
伊藤 整	死の中の生	342
大田洋子	原民喜の思い出	346
平田次三郎	原民喜の死について	349
梅崎春生	その文学	352
谷田昌平	その表情	354
大久保房男	忘却への警告	356
佐々木基一	花幻想という会	359
梶山季之	孤独な詩人の孤独な石碑	362
望月優子	「天邪鬼」のころ	365
林 光	原さんは生きているべきでした！	393
IV 拾遺集	「原爆小景」とぼく	395
401		

定本
原民喜全集
別卷

I

勝本清一郎 原民喜断章

原民喜を見識ってからちょうど一年になる。この一年のあいだに原民喜はすこし変った。彼はやゝ古ぼけた過ぎ去った日のなかに生きていた。亡くなった妻君の追憶のなかに彼の、いっさいの、狭い、しかし純一な世界があった。そしてその人間も作品もぼろりと薄れた古写真のように私のまえにあらわれ、その輪郭をとらえようとするのに、もどかしさを感じさせた。たゞすべての古写真が人の心をひく何かを持っているようなできかたで、私の心をひいた。カリエールの絵のような存在といつては、賞めすぎであつたらう。ああ云つた単色の薄れかたの奥にたくましい造形があるとは云えなかつた。どの作品も中心点が弱かつた。と思つて見ていると、その原民喜が現在の世の中のなまなましい現象のなかに生きようとし始めたのである。「近代文学」に載つた「火の腫」や、「個性」に載つた「災厄の日」を見るとそれが分つた。人間としても前には人と対坐して一分間に一語ぐらゐしか発語しなかつた彼が、いつか五、六語ぐらゐはものを云うようになった。確かに少し変つた、堀辰雄の素質ともかなりちがう事がはつきりした。

「三田文学」に載つた「忘れがたみ」・「小さな庭」・「ある時刻」・「夏の花」これらの散文詩や小説は、彼の前の

作品である。そのどれもが小さな過去の日につながれている。その中で「夏の花」は、広島に原子爆弾の落ちた時のことを描いた小説である。現在の人類の知識の一番新しいものもたらした現象をも、この作者はやはり過ぎ去った日のなかに生きている人としての眼で淡々と描き出したのである。このことがこの作に一応の安定を与えた。この作者は人類空前の事象を描くのにどぎつい絵の具の山盛りや無我夢中の絶叫を必要としなかった。新しい奇蹟を過去の詩の言葉でもの静かに語った。古い手法の及ばないところへは言い及ばなかった。そこでかつて奇蹟の一端をリアルにとらえることが出来たとも云えるし、また新しい奇蹟のもっと根本的な性格を取り落したとも云えよう。一つの手法とその限度という問題がそこにあった。作品とそこへ反映するもっと大きないきいきした現実世界との距離という問題もそこにあった。

こんな問題にぶつかると、人は過去の言葉や過ぎ去った日のなかだけに生きていられなくなる。原民喜は「火の踵」で戦後の巷に氾濫する金属音をキン／＼云わせ始めた。しかしその音だけが浮いてしまった。「災厄の日」でもやはり戦後の社会現象と自分との距離を縮めようと試みた。過去の日の中に生きている眼で現在を見ることをやめて、現在の日のなかに生きている眼でそれを見直そうとし始めた。この距離の適当な縮めかたは成功したように思う。

そうかと云って原民喜はこの距離を零にしてしまって、多くの戦後作家のように戦後の社会現象の中に没入し、断末魔の踊りを自らで踊り狂う立場になってしまった訳ではない。私の彼に対する第一印象から行けば、彼はむしろそうした戦後の人物に見えた。戦争で荒れてガランとした建物の二階の一室に、置き忘れられた野菜のように彼はポツネンと一人で住んでいた。こわれた世界にこわれて生き残った人物の一人であった。表現主義の作品の中からよめいて出て来た実物さながらという生存ぶりであった。私は「三田文学」の編輯者としての彼

に始めて逢ったのであったが、彼のそういう風手に接すると、頼まれていた原稿に透谷のことを書くつもりでいたのを変えて、表現主義に關しての短文を書いてしまった位であった。私は彼の人柄と作品とをくらべ合わせて見て、彼がもっと突き詰めて行くとしたら、その作品中に何とも奇妙な不思議な、薄氣味の悪いようなものが見かたや想念をひそませるに至るのではないか、という勝手な期待さえ持ち始めてしまった。別に語調を強めなくても、また冷い針のような鋭さでなくても、作品の底にあるものが深いところで現実の底流に触れて燐光の合図を発するような芸術というものがあるものである。原民喜はそんな不思議な芸当が出来る作者になるのではないか、と思ひ描いたのである、今でも私は彼が沈潜した形でそういう奇妙なものを書くのではないかと期待を捨ててゐない。がまた、彼が案外リアリストであることを知って来ている。この点では彼の本質を私がいくらか誤解していたのである。従つて作者としての彼がその奇妙な人物そのものに成り切つてしまふであらうとはすでに期待していない。「災厄の日」では彼は戦後の日本社会のこわれた物の堆積のような事象に近接した描写をなしとげた。その描写の軸の中には冷静なリアリストがいる。三田の作家のうちではいわゆる戦後文学に、素質的にも一番親近性を見せている彼である。「忘れがたみ」のような、いわば一番遠い境地から、彼は彼なりにここへ出て来た彼がまだ残している距離を生かすか、あるいはそれを零にして仕舞うような身の入れかたをするかが今後の問題である。前の境地にとどまってもそれはそれなりに、むしろ他人よりさきに覺めた戦後のリアリズムの一方向であり得る。私はその方向での現在社会との深い取り組みかたを彼に期待している。

伊藤整・神西清・福田恆存

創作合評

「群像」昭和二十四年一月号

伊藤 では原民喜君の「火の踵」(近代文学十月)にいきましょう。これは原君にしては変っていて、一種の危なっかしい作品だと思うけれど、強い確かなものがあって、興味のある作品だったので。

神西 僕も同感です。今度の作品の中ではいちばん文学的に興味をひかれた。原民喜という作家は、実に感覚のするどい人です。その感覚が普通に離反してぐいぐい即物的に生きていくその生態を、僕はあの体験記を読みながら非常に新鮮に感じた。

伊藤 この「火の踵」というのは、下手をすると、新感覚派に戻るかも知れないし、崩れると今様の部屋のないう話になってしまいますが、どっちにもならなくて、強力に観念を花みたいに開かせたところがありまして、そういう点が作品の方々に現われている。作品全体がそういう強い観念の造型というふうにはまっていないけ

れども、その現われているところは新鮮で面白いと思いました。

神西 天性から言うと、この人はむしろ静かな情感的な心の持主らしいんですがね。病床日記のようなものを丹念に書ける部類の作家です。静謐な観照もあるし、それを裏づける誠実さもあるんです。だがこの作品の場合、僕は誠実さというものをことさら問題にしないで、むしろ新しいスタイルへの冒険——いやむしろ烈しい陣痛のようなものに注意したいと思うな。

福田 それはそうですね。これは非常に面白かったが、技術的な面で、最初から何かに追われるようにしている主人公が、最後に檜の木立を仰ぐまで……。

神西 あれはいけないな。あれが実感だったかも知れないけれど、あの木にしほりをかけておしまにする法はない。

福田 要するに終りまで、もう少しアレグロの形で進む感じが強く出るといいと思うけれど、ときどき引っかかって渋滞する面がある。

神西 その緩徐調との間の不協和を狙っている作品じゃないかしら。ある反省を経たシュールレアリスム的な実験が感じられますね。しかしその渋滞として感じられるのではないですね。この作家は困難だらうけれどこの作品のような道を当分歩いて行ってもらいたいような気がする。だんだん今の檜の木のような夾雑物が洗われて行くでしょう。

伊藤 僕は、そこに力点をおかないで読んだから感じなかったが、そういう点があるかもしれませんね。

神西 少し註文が過ぎたかも知れません。

中野好夫・林房雄・北原武夫

創作合評

「群像」昭和二十四年十月号

中野 次に「鎮魂歌」(原民喜——群像八月)ですが、これは三田の人ですね。

北原 そうです。

中野 私はこの作者のものは実は初めてなんです。別に理由はないが、なんとなく読み落していたんです。だから今までどういうものを書いているか知らないで相すまんが、僕は率直に言ってこれはわからない。私はなにも十九世紀的な手法だけが小説の全部ではないと思うているし、こういう小説の手法、内側から書いて行くデフォルマシオンも当然一つの途で、それを頭から否定するわけでは毛頭ないが、この「鎮魂歌」は率直に言っても全くわからない。いけなければ批評家失格でも結構だ。

北原 僕はこの人の作品はよく読んで知っていますが、原君にはまだ詩魂というものが充分に強くないので、

こういうものは大体無理なんだろう。

中野 今までもこういうものですか。

北原 大体こういうものです。原君には、自分の考えている詩の世界と、リアルなものを見てしまう眼の世界と、両方がある。その板挟みで悪戦苦闘しているんですが、どっちかというと、精神の強い人ではないので、つい眼に見えるリアルなものに負けてしまう。性向としては詩的世界で支えたいと思っているんですが。だからこういう題材なんかだと、誰よりも自分自身が昏迷してしまいうんですね。それで力作になればなるほど、こういう晦渋なものになり終るんじゃないんですか。

林 これは中野君ならずとも、わからないと言いたいですね。「鎮魂歌」ですから歌おうとしているし、大いに歌っているのですが、この広島という大きな体験を持っているその傷あるいはそれによって失われた魂を鎮めようとする意図はわかるのですが、それであるならもっと言葉を節約して、ほんとうの歌にしてわからせてもらいたいと思うんですがね、例えば、死について、愛について、孤独について……、というアポリズムみたいなものがならんでいるが、全然詩になってない。

中野 水上賞をもらった作品というのは？

北原 それもそういうものです。

林 「鎮魂歌」なら、読んだ人の魂を鎮めるような小説であってほしい。

中野 あれだけの大きな体験をしているのだから、今度はそれを一つ小説でない形で書いてもらって、それからこれを読むと、あるわかるものがあると思うのですよ。だれでも人間だから、感覚的人間としては深く感じているに違いないでしょうけれど、その体験の意義を体験による思念としてほんとうにつかんでいるかどうか疑問